

2018/02/11

## 「神と人との関係」

### ■旧約聖書の時代と新約聖書の時代

神様に対する呼び方で、旧約聖書の中で圧倒的に多いのは、「万軍の主」という呼び方です。そして、万軍の主である神様に対して、ダビデは「しもべ」と呼ばれています。

「今、わたしのしもべダビデにこう言え。万軍の主はこう仰せられる。わたしはあなたを、羊の群れを追う牧場からとり、わたしの民イスラエルの君主とした。」(Ⅱサムエル 7:8)

「あなたの御名がとこしえまでもあがめられ、『万軍の主はイスラエルの神』と言われるように。あなたのしもべダビデの家が御前に堅く立つことができますように。イスラエルの神、万軍の主よ。あなたは、このしもべの耳にはっきり、『わたしが、あなたのために家を建てると言われました。それゆえ、このしもべは、この祈りをあなたに祈る勇気を得たのです。』(Ⅱサムエル 7:26-27)

旧約聖書の時代は、神様は万軍の主、王の王であり、神様と私達の関係は、主人としもべ、あるいは、王と奴隷という関係と教えられてきました。この地上の君主や首相など権威ある人に、自分から近寄って相談することなどできないのと同様に、神様に対しては、ただ絶対服従すべきであり、個人的な相談をすることなど考えられないことだったのです。

ところが、新約聖書になると、神と人との関係は、ガラッと変わります。主人としもべではなく、親子の関係になったのです。新約聖書では、神様のことを「アバ父」、つまり、「お父ちゃん」「お父さん」と呼ぶように教えられ、ぐっと身近なものになったのです。

「このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」(マタイ 5:16)

「それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。」(マタイ 5:45)

「人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません。」(マタイ 6:1)

「だから、こう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。』」(マタイ 6:9)

このように、聖書が教えている神と人との関係は、旧約聖書と新約聖書では、ずいぶんと異なります。いったいどちらが正しいのでしょうか。万軍の主とお父ちゃんでは、まったく

つきあい方が異なりますから、どちらの関係を築けばよいのかがわからないと、私達は困ってしまいます。

## ■なぜ神の呼び名が変わったのか

なぜ、旧約時代と新約時代で神の呼び名が異なるのでしょうか。それは、二つの世界に由来します。二つの世界とは、死の世界と神の国という世界のことです。

死の世界とは、神との結びつきがない状態の世界です。それは、今私達が暮らしている世界であり、すべてのものが滅び、永遠に生きることはできないところです。そのため、この世界で生きる者にとっての神は、滅ぼす神であり、絶対服従しなければならない恐ろしい王というイメージになってしまいます。その結果、死の世界での神の呼び名は、万軍の主となるわけです。神との結びつきがない状態においては、神は絶対者であり万軍の主という、誰も近寄ることができない存在なのです。

しかし、実は、世界はもう一つあるのです。それは、死が支配する世界ではなく、神が支配する神の国です。神の国には死がありません。永遠に生きる世界です。死の世界には競争があり、そこから嫉妬が生まれ、互いに愛せなくなりますが、神の国では生きるための争いが生じませんから、互いに愛し合う関係しか生まれません。その結果、神の国における、神と人との関係は、父と子という親子の関係になるのです。

旧約時代は、神の国が明らかにされていなかったため、死の世界に生きる人間にとって、神様は万軍の主でしかありませんでした。しかし、イエス・キリストがこの地上に来られたことによって、私達は神の国を知りました。イエス様がこの地上に来られた目的は、人々に神の国を伝え、その国を受け取らせるためです。

「万軍の主」が「天の父」に変わったのは、それぞれの世界に合わせて表現されているためです。つまり、どちらが正しいかというと、イエス・キリストを信じる私達にとっては、神の国の関係が正しいということになります。

## ■神の国

「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。」(マルコ 1:15)

イエス様が公に宣教を始める時の第一声が、この言葉です。これは、原文通りに訳すと、「時が満ち、神の国は来た」です。原文は、現在完了形で書かれており、「すでに完了し、その状態が今も続いている」という表現です。「悔い改め」とは、心を神に向けるという意味で、原語には「反省」という意味はありませんから、日本語で理解する場合には注意が必要です。

要するに、ここでイエス様が言われたのは、「私が来たことで神の国はすでに来た」、すなわち、「イエス様ご自身が神の国であるから、私に心に向けて福音を受け取りなさい」という

ことです。

さらにイエス様は、神の国について、次のように語っておられます。

「さて、神の国はいつ来るのか、とパリサイ人たちに尋ねられたとき、イエスは答えて言われた。「神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。『そら、ここにある。』とか、『あそこにある。』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」(ルカ 17:20-21)

「神の国はあなたがたのただ中にある」とは、神の国はイエス様と共に来たのであり、神を信じる者は、すでに神の国を持っているということです。

この世界での私達の体は、やがて朽ちる死の体です。しかし、信じる者の魂は、神の国にすでに入っていて、神の国で生活しているのです。こちらこそが本当の暮らしです。ですから、イエス様は、今あなたは神の国にいますと言われたのです。私達は、この体が朽ちる時、朽ちない体に変えられて、体ごと神の国に移動するのです。

「あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。」(I コリント 3:16)

「あなたが神の住む宮である」とは、あなたの中に神の国が来ており、神様は、あなたの中であなたと一緒に生活を始めている、あなたの魂は神の国に生きているということです。ですから、「あなたはすでにしもべではない、私はあなたを友と呼ぶ」と、イエス様は言われました。

「わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。」(ヨハネ 15:15)

神を個人的に知らなかった時、私達は死という運命は逃れられないものだと思います、神は絶対者で近寄れない方だと思っていました。しかし、イエス・キリストを受け入れることによって、私達は神の国をいただいたのです。魂はすでに神が支配する国に入れられ、御霊なる神と共に生きています。私達はもはやしもべではなく、神の子とされたのです。

「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父。」と呼びます。」

(ローマ 8:15)

私達は御霊によって、神の子とされました。こうして、神と人との関係は変わったのです。神様は私達にとって優しい父親ですから、恐れることはありません。私達と神様は、神様を「お父ちゃん」と呼び慕うことのできる、想像を超えた関係となったのです。

神様は、あなたにとってどんな父親でしょうか。私達はいづれ自分自身の父親のイメージによって、神様のイメージを決めてしまうものですが、あなたのお父さんである神様は、自分の子のためなら命さえ惜しまずに助け出す父親です。それが十字架です。私達が想像する以上に、いつも共にいてくださり、いつも声をかけてくださり、どんな問題も一緒に考えてくれるお父さんです。

あなたは、このあわれみ深い神、共に生きてくださる神を、本当に知って、交わって生きているのでしょうか。

## ■神様とどのように関わるか

### 1.何事も神に相談し頼る

旧約時代は、個人が神様に祈ることなどできませんでした。神様に近づくことができるのは祭司だけでしたから、祭司にお願いするしかなかったのです。しかし、今は違います。私達は祭司であり、一人一人が神様に祈ることができます。

「御霊も同じようにして、弱い私達を助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私達のためにとりなしてくださいませ。」(ローマ 8:26)

父は、子どもにできないことがあれば助けてくれます。親は、小さな子どもが自分の気持ちを説明できない時、「○○なんだよね。つらいよね。」と声をかけてくれるものです。神様も同じように私達をとりなしてくださいませから、うまく言葉にできなくても、遠慮しないで祈れば良いのです。

「父なる神様」という関係を本当に知るなら、どんなことでも祈り、遠慮なく神様の助けを受けに行きましょう。李登輝やリンカーンといった世界を動かしたリーダー達も、祈ることなくしては何もできなかったと証しています。

### 2.神はいつでもあなたの味方

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」(ローマ 8:28)

皆が反対し、あなたを憎んだとしても、父は絶対にあなたを憎んだりしません。自分の子ですから、なんとしても守り、助けてくれるのです。ですから、あなたが抱えている問題や自分の罪や失敗を、正直に神様に言い表すなら、神様がうまく助けてくださいます。

子どもの時、自分が失敗をして、親が代わりに謝ってくれた経験のある人もいるでしょう。父にとって子どもの失敗は他人事ではありません。神様は、あなたが何をしようとも、あな

たの味方です。

「では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」（ローマ 8:31）

お父さんはあなたの味方です。天の父があなたの味方なので、誰もあなたの敵にはなれないのです。

### 3.愛されようとする努力はいらない

親の愛は生涯変わることはありません。神様は、十字架を通して、どれほどあなたを愛しているかを示してくださいました。神様は、人間がどのような罪を犯したとしても、アダムとエバを造られた時から変わらずに私達を愛してくださっているのです。

「私達をキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。・・・死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私達を引き離すことはできません。」（ローマ 8:35-39）

親はあなたがどんな時でも飛んできて助けてくれます。親子の愛は絶対であり、愛されようとする努力はまったく必要ありません。ですから、神様は私達に、できることをすればいいと教えて下さっています。

この地上で私達は、人の愛を得るためには相手を傷つけないで、喜ぶことをやってあげなければならないと学んできました。けれど、神様からは、愛されたいと思わなくても、いつでも愛されているので、心配しなくてもよいのです。

どんなときも父はあなたの味方で愛してくれるから、心配はいらない。どんなことでも父に打ち明けて頼りなさい。——これが、イエス様が私達に伝えようとしておられる、神と人との関係です。あなたにとって、神様はもう万軍の主ではありません。

イエス様は十字架の上で、ご自分を殺そうとしている人に対して、「父よ、彼らを赦して下さい。彼らは何をしているのか、自分でわからずにやっているのです。」とおっしゃいました。神様は、私達をそのように受け入れておられるのです。

私達がおろかであっても、間違ったことをしてしまっても、神様の目から見れば、私達は何をしているのかわかっていない子どもなのです。だから、神様は私達を裁かないで赦して下さいます。私達は子どもだから、自分では正しいと思ってやっているけれど、親から見ればわかってないなと思うことだらけです。ですから、父なる神は、一生懸命私達を助け、愛してくださるのです。